

国士舘大学審査学位論文

「博士学位請求論文の内容の要旨及び審査結果の要旨」

「日本近代はいかに準備されたのか

－安土桃山時代と江戸町人文化についての考察－」

フロレンティナ エリカ アユニングティアス

氏名 フロレンティナ エリカ アユニングティアス  
学位の種類 博士(政治学)  
報告番号 甲 第37号  
学位授与年月日 平成28年3月20日  
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当  
学位論文題目 「日本近代はいかに準備されたのか」  
—安土桃山時代と江戸町人文化についての考察—  
論文審査委員 (主査) 教授 的射場 敬一  
(副査) 教授 藤森 馨  
(副査) 教授 藤本 吉蔵

## 博士論文要旨

### 日本近代はいかに準備されたのか —安土桃山時代と江戸町人文化についての考察—

フロレンティナ エリカ アユニングティアス  
(Florentina Erika Ayuningtyas)

アジア・アフリカ世界は、19世紀の末に、西洋の衝撃を受けた。日本も例外ではない。ほとんどの国は、西洋諸列強の植民地になる。その中で、明治日本だけが植民地化を免れ独立を保つことができ、スムーズに近代化西洋化を成し遂げ、国民国家の形成を行うことができた。明治維新の大変革によって、士農工商という身分制度と幕藩体制による伝統社会が一瞬のうちにして四民平等の近代社会に変貌するのである。まるで魔法を使ったかのようなのである。それどころか欧米諸国の文物や政治制度や法制度を大胆に取り入れて、短期間のうちに諸列強に伍することができる国にまで急成長した。日本の近代化は、まさに「アジアの奇跡」である。

これに対して母国のインドネシアを含め、アジア・アフリカの国々は、19世紀末の西洋の衝撃の中で植民地化を余儀なくされたが、第二次世界大戦後、植民地から解放され独立を達成することができた。しかしながら、どこの国も国民国家の形成と近代化に呻吟している。アジア・アフリカのどこの国も古代中世的な社会構造の頑固さ、伝統的な社会の遺制に苦しんでいる。伝統社会の構造は思ったよりもずっと強固で簡単には壊れないのだ。インドのカースト制度がそうであるように、法的に廃止されたからといって、その現実が簡単に変わる訳ではない。政治的に独立を達成することができても、近代的な法制度や民主的な政治制度を構築できても、伝統社会の遺制が簡単に消え去る訳ではないのだ。政治

制度の改革よりも社会や文化の変革の方がずっと大変なのである。アジア・アフリカのどこの国も古代中世的な社会構造の頑固さ、伝統的な社会の遺制に苦しんでいる。そして、それが社会の近代化を遅らせ、民主化を妨げている。

とすれば、日本社会のスムーズな近代化、経済成長、国民国家の形成の謎解きを、明治維新とその後の西洋化だけに求めても、それは浅薄の謗（そし）りを免れないのではないか。つまり、「なぜ明治日本だけがあのようスムーズに近代化西洋化を成し遂げ、国民国家の形成が行うことができたのだろうか。その秘密を解く鍵を、幕末明治維新の諸変革だけに求めても、おそらく正解は得られないのではないか」、これが日本に留学し研究を続けてゆく中で芽生えてきた疑問である。

「近代化」というキーワードで日本の歴史を再考察した。考察を重ねていくなかで、日本史の、日本の社会史の転換点が、近世社会、つまり、織豊政権にあることに気づいた。その転換を促したものは、信長よる政策である。特に都市政策こそが画期になっているのではないかということに気づいた。信長の登場は、単に戦国時代の覇者であるというだけでなく、それまでの日本社会の歴史を断ち切っていること、つまり、信長が天下取りの途上で行っている政策は、古代中世の遺制を潰し、近代を準備するものを作り出しているということに気づいた。ということで、私の博士論文を書く上での仮説は、「日本の近代を準備したものは、日本の近世社会にあるのではないか、つまり、日本の近代は、すでに日本近世、織豊政権の時代に準備されていたのではないか」ということである。ペリーの来航を契機に他のアジア諸国と同様に日本も再び世界史の過程に組み込まれた。その中で日本だけが例外的に諸列強に蹂躪されることなく独立を保ち、西洋文明をスムーズに受け入れ急激な「近代化」を成し遂げることができた。それが可能であったのは、日本近代が幕末までに準備されていたからこそではないか、というのが、この博士論文の大きな問題意識である。

織田信長こそが画期だと思ったので、第1章では、信長の天下取りの偉業と政策について歴史的に丁寧な追いかけることにした。信長は、天下取りの途上で、すでに中世社会の社会的基盤であった荘園制や寺社勢力を次々に潰している。信長にとっての敵は、諸大名だけでなく比叡山延暦寺や石山本願寺であった。比叡山延暦寺も石山本願寺も、まさに古代中世的な社会を象徴するものであった。比叡山延暦寺も石山本願寺も武装しており僧兵を抱えていた。一向一揆が起こったときには、必ず後ろに石山本願寺がいた。社会が古代中世的であるというのは、庶民が武装していること、国の基礎が農業にあること、政治と宗教が結びついていることである。比叡山延暦寺や石山本願寺などの宗教勢力は、独自に武装し租税を徴収し社会的に自立して存在していたのである。

信長は京都に攻め上がるために斎藤道三の居城があった岐阜を陥れるが、単に城砦としての城として岐阜を手に入れただけでなく岐阜の城下町も作っている。つまり、城下町を作り、楽市楽座を実施することで、商工業を富の源泉として組み込んだ。信長と秀吉の安土桃山時代がもたらしたのは、農業が国家の富の源泉であるような社会から商工業が富の源泉でもあるような社会への転換の契機であり、そういう意味で、日本の「近代」を用意したのは、織豊政権であると言っていいだろう。確かに政治的な近代は明治維新によってもたらされるのであるが、社会、特に経済的な意味での社会の近代は、織豊政権の政策に

よって準備されたのではないだろうか。その政策の要として都市の形成、町づくりがある。楽市楽座を実施する城下町を作り、商人を呼び寄せ市場としての町の育成を図ったのだ。

アジア諸国においても都市がたくさんあり、多くの人が集まっているが、その都市は織豊政権におけるような自立している都市ではない。それ自体が富を生み出すような都市構造にはなっていない。例えば母国インドネシアの場合は、都市は宗主国オランダによって作られ、オランダの出先機関としてインドネシアの農村を収奪する、富を集めて持っていくという役割をもっていた。ほとんどが農村の富の収奪機構になっている。外国の資本が農村を収奪するためだけのようなものであり、都市そのものが自立して、豊かになるような構造を持っていない。他方信長は、町そのものが富を生み出すような町づくりに意識的に取り組んでいる。楽市楽座を導入し、町の掟を作り、鍛冶屋町、商人町などを作っていた。都市は単なる政治の中核として、支配者の居住地というだけでなく、商人街、職人街を作ることによって、町そのものが富を生み出し豊かになるようにした。それだけでなく町づくりの一環として地域ごとの交流や交易が盛んになるのを妨げる関所を撤廃し関銭（通行料）を廃止したり、往来が盛んになるように道幅を広げたり橋を架けたりなどの公共事業も行っている。

信長によって切り開かれた道は、秀吉に継承された。第2章では、秀吉の都市政策に重点をおいて考察した。この秀吉による都市政策を支えたのは、太閤検地や刀狩という政策であった。秀吉は検地を全国規模で徹底的に実施することによって、信長がやりはじめた荘園制度の解体を最後まで推し進めたのである。この検地によって、石高制が確立し、封建領主の土地所有と農民の土地所有が全国的に確定された。また、秀吉の刀狩政策によって武士以外の身分の武器所持が原則として禁止され。秀吉の刀狩は、中世からつづいた統治や社会の仕組みを、近世へのそれへと転換する画期的な試みであった。

都市政策においては、秀吉は城づくりと同時に町づくりも行っている。室町時代には商品経済の発展によって、城下町、港町、宿駅町、門前町、寺内町など多く都市ができたため、農村から都市が分かれてくる。しかし、それを明確に位置づけたのが秀吉である。秀吉が造った長浜や大坂、そして京都の聚楽第などを見ても、その都市計画はしっかりしたものである。都市は、政治や経済の中心として組織された。当時の京都も秀吉によって完全に城下町として再編された。京都は古代の天皇と公家の町ではなくなって、城下町になった。秀吉は築城した聚楽第を中心に京都の町を編成しなおしているのである。

近世以前の都市は、消費都市であった。これに対して信長と秀吉は、それ自体が富を生み出す生産都市を創った。富の源泉はそれまでは農業だけだと考えられていたのに、商工業も富の源泉だと考え、農村で生み出された富を消費する都市ではなく、富そのものを生み出す都市を意識的に創り出したのである。

江戸時代には、「織田がつき、羽柴がこねし天下餅、すわりしままに食ふは徳川」という狂歌がある。信長・秀吉・家康三人の天下統一を餅つきに例えたものであるが、織田信長が天下統一の先駆けとなり、信長の継承者である豊臣秀吉が近世社会の基礎を築き、徳川家康は座りながら二人の苦労の結晶を悠々と「食べている」、つまり、享受しているということであろう。第3章では、徳川幕藩体制の意義について考察した。慶長5年（1600年）の関ヶ原の戦いで勝利を収めた徳川家康（1542-1616）は、慶長8年（1603

年)に征夷大將軍の宣下を受け、天下人となり、幕府を開いた。天下餅の例えにあるように、天下布武という統一と秩序の実現は、信長、秀吉、家康の三者共通の目的であったにも関わらず、織豊政権と徳川政権の統治体制とその基盤は驚くほど異なる。信長と秀吉は、「楽市楽座」政策による安土や「天下の台所」と呼び習わされた大坂に象徴されるように城下町という都市を築き、商工業を育成し、それを国家繁栄の基礎とした。これに対して、家康は、社会の基盤を、時代を逆戻りさせるかのように農業に求めた。

農業にしか求めていなかったこそ、町人が大きくなり少しずつ実権を握るようになった。例えば、徳川綱吉(1680-1709)はこの農村を向いた政策を強行しようとしたが、失敗した。社会が大きく変貌していたからである。江戸時代の社会経済を裏で実質的に支えていたのは町人であり、都市経済は商人層に支配されるようになっていた。町人は本来幕府や各大名たちの用達をするために城下町に呼び集められたのだが、平和な時代の中で商品経済は発達し、幅広い階層にまで商品を売買するようになった。これは全国レベルで商品流通が発達し始めたということの意味する。

第4章では、江戸時代における町人文化の隆盛について考察を行った。徳川家康の江戸時代は、基本的には、この信長と秀吉によって敷かれた軌道の上を走っている。支配階級は確かに武家であるが、元禄や化政の文化に象徴されるように、文化の担い手は武家というよりはむしろ町人に移っている。信長が播(ま)き、秀吉が育てた町人文化という苗が、大きく育ったのが江戸時代である。つまり、支配者階級として武士は威張っているものの、社会の中心で活躍しているのは町人である。理念としては、士農工商という身分制度の最下層に属する町人が、社会や文化の主要な担い手となっているのが、江戸時代なのである。

日本の歴史の中で、江戸時代はとくに封建的であり、男尊女卑の社会であったと言われている。そのため、女性は虐げられていたと言われている。しかし、浮世絵や井原西鶴(1642-1693)などの好色物や近松門左衛門(1653-1724)の心中物に描かれている女性を通して江戸時代を眺めると、そこには生き生きと活躍している町人女性の姿を見ることができよう。そのことを端的に例証するのが、小袖である。小袖は現在の「着物」の原型となった衣服であるが、平安時代には貴族たちが着ていた十二単の肌着として身につけていたものである。戦国時代から江戸時代初期には表着となり武家も着るようになった。やがて町人女性も着るようになった。

元禄文化の時代になると町人階層による小袖の着用も進む。友禅染の技法が登場したことで、豪華でありながらも絞技法と比べると作る期間が短縮できるようになったことで、小袖はますます広い階層の人々によって着られるようになっていく。小袖を消費する階層が幅広くなったのだ。町人の経済力は武家を上回るようになり、町人女性の生活様式や服飾も変わっていく。元禄期に発展した出版文化も小袖の流行の背景になっている。当時の町人女性たちは、大衆文化である雛形本や浮世絵を中心に小袖の流行の担い手であった。まさに小袖は大衆化したのである。町人女性のニーズを取り込むことで出現した新しい技法やデザインなどが、それまでとは逆に武家女性に取り入れられるまでになった。武士が支配階級であったが、元禄や化政の文化に象徴されるように、文化の担い手は武家からむしろ町人に移っている。だからこそ、小袖の流行の発信源が武家の女性から町人女性に移

っているのである。町人女性が小袖の流行の発信源となっていくのである。町人女性が、武家女性に代わってファッションの主導的位置に立ったのである。それは、町人および町人女性の地位の上昇を象徴するものであろう。武家女性よりもはるかに自由な振る舞いが可能であった町人女性が、自分たちの生活に合った小袖を求め、自らのアイデンティティを強調するようになったのである。

幕藩体制という枠組みは明治維新になるまで崩れることはなく、そういう意味では、江戸時代は武家が統治階級である武家社会である。だが、社会の外枠の統治からその内実の文化へと目を移すと、江戸時代の文化が町人文化と称されるように、文化の担い手は町人となっていることに気づくだろう。社会の平準化は平和な時代を背景に進み、社会や文化の担い手は、明らかに町人に移ってきていたのである。小袖を通して見えてきたのは、幕藩体制によって全国に平和がもたらされ、さらに鎖国によって対外的な緊張から解放された平和な江戸社会で進行していた日本社会の構造変化である。町人文化の興隆と小袖の流行の発信源が武家から町人へ移行していること、そして、小袖を着る階層の拡大が指し示しているのは、信長と秀吉によって敷かれた近代化の軌道を、日本社会が静かに、しかし着実に走っていたということである。浮世絵や井原西鶴などの好色物や近松門左衛門の心中物に描かれている、自由で闊達な、そして生き活きと働き生きる町人の男女の姿には、日本社会がその中にすでに明治維新を胚胎していたことを見て取れるだろう。それこそが、まさに明治維新後、ほぼアジア・アフリカ唯一と言っていい「富国強兵」を成し遂げることを可能にし、諸列強の帝国主義的進出の時代に日本の植民地化を免れさせただけでなく、その後の経済成長での「アジアの奇跡」の秘密だったのではないだろうか。

氏名 フロレンティナ エリカ アユニングティアス  
学位の種類 博士(政治学)  
報告番号 甲 第37号  
学位授与年月日 平成28年3月20日  
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当  
学位論文題目 「日本近代はいかに準備されたのか」  
—安土桃山時代と江戸町人文化についての考察—  
論文審査委員 (主査) 教授 的射場 敬一  
(副査) 教授 藤森 馨  
(副査) 教授 藤本 吉蔵

## 博士論文審査結果の要旨

### 政治学研究科政治学専攻

氏名：フロレンティナ エリカ アユニングティアス  
(Florentina Erika Ayuningtyas)

### 論文タイトル

日本近代はいかに準備されたのか  
—安土桃山時代と江戸町人文化についての考察—

フロレンティナ・エリカさんの論文テーマは、「日本近代はいかに準備されたのか」であり、「安土桃山時代と江戸町人文化についての考察」という副題をもつ。論文の審査の途中で何度も指摘されたことであるが、これまでの日本史理解の常識に、日本の近代化論の常識に正面から挑戦する非常にポレミックな論文である。

この博士論文で明らかにしようとした主題を理解するには、彼女の強烈な問題意識を共有する必要があるだろう。彼女はインドネシア政府の国費留学生として日本にやってきた。明治維新後の日本の留学生がそうであったように、彼女も母国インドネシアの未来を担っているのである。その母国インドネシアは、他のアジア・アフリカ諸国と同様に、オランダの植民地になり、独立後もなかなかスムーズに社会の近代化ができないでいる。彼女は、このように述べている。「国民統合とスムーズな近代化がいかに困難であるのか、とりわけアジア・アフリカ世界においてはとりわけ困難だというのが、世界の常識であり、「母国のインドネシアを含め、アジア・アフリカの国々は、どこの国も国民国家の形成と近代化に呻吟している。政治制度が近代化されたからといって、憲法や法律が近代化され民主化されたからといって、社会が近代化され民主化される訳ではないということ」を痛感している。伝統社会の構造は思ったよりもずっと強固で簡単には壊れないのだ。政治制度の改革

よりも社会や文化の変革の方がずっと大変なのである」と。

政治的に独立を達成することができても、近代的な法制度や民主的な政治制度を構築できても、伝統社会の遺制が簡単に消え去る訳ではない。アジア・アフリカのどこの国も古代中世的な社会構造の頑固さ、伝統的な社会の遺制に苦しんでいる。そして、それが近代化を遅らせ、社会の民主化を妨げている。とすれば、日本社会のスムーズな近代化、国民国家の形成の謎解きを、明治維新とその後の国民国家形成だけに求めても、それは浅薄の謗りを免れないだろう、と。つまり、明治日本においてなぜあんなにスムーズに近代化が進み、国民国家の形成がなされたのか、それはすなわち士農工商という身分制の世の中から四民平等という国民が自由で平等な社会への転換がなされたということであるが、その秘密を解く鍵は、おそらく、明治維新に先立つ社会、江戸幕藩体制下の日本、それ以前に日本の社会の中にあるのではないかというのが、彼女の問題意識である。近代的なるものを見つけるというよりも、古代中世的なものとの切断という意識で日本史を再検討してたどり着いたのが、戦国時代を統べた織田信長である。彼の天下統一の事業とその政策、それを継承した秀吉、そして、この二人によって敷かれた社会の軌道を走る江戸幕藩体制と江戸の町人文化こそが、日本の近代を準備したと彼女は見切ったのである。

ということで、彼女は、論文の構成を以下のようにしている。目次をそのまま紹介することにする。

序論	1
<b>第1章 織田政権の発足と近世の始まり</b>	<b>6</b>
第1節 織田信長の天下取り	6
第1項 尾張の虎 織田信秀	6
第2項 かぶき者信長と親衛隊	10
第3項 清州攻めから桶狭間合戦までの戦い -内側と外側の敵-	14
第4項 天下布武	21
第2節 宗教勢力との戦い	37
第1項 古代律令国家から中世社会へ	37
第2項 寺社勢力 -経済力と軍事力-	39
第3項 比叡山延暦寺の焼き討ち	44
第4項 石山本願寺との戦い	47
第3節 自由経済を目指す信長	54
第1項 関所撤廃と道路整備	54
第2項 水運と都市支配	57
第3項 都市建設と楽市楽座	60
第4項 安土のまちづくり	64
第4節 信長と文化	69
第1項 文化空間としての岐阜城と安土城	70
第2項 キリスト教と南蛮文化	75
第3項 相撲と馬揃え	78
第4項 茶道政道	82
<b>第2章 豊臣政権</b>	<b>85</b>
第1節 関白秀吉 -信長の継承者-	85
第1項 足輕の息子から関白へ	85
第2項 長浜城「一国一城の主」	93
第3項 関白と大坂城	97
第4項 天下人秀吉と京都	99
第5項 秀吉の政策 -太閤検地と刀狩-	105



第2節 秀吉の都市政策	109
第1項 長浜と財政基盤としての近江	109
第2項 政治経済の中心地、大坂	112
第3項 聚楽第、伏見桃山、京の都の再編成	118
第3節 秀吉と桃山文化	122
第1項 桃山文化の特徴	122
第2項 黄金太閤とその政治政略	124
第3項 茶の湯と茶会	126
第4項 桃山文化と小袖	126
<b>第3章 徳川家康と幕藩体制</b>	128
第1節 徳川幕府による支配の確立	128
第1項 徳川幕府	128
第2項 大坂の陣と大名の統制	130
第3項 朝廷の統制	134
第4項 寺社の統制	135
第2節 幕藩体制と身分制度	137
第1項 幕藩体制と士農工商	139
第2項 武士の非武装化	139
第3節 大都市江戸と国内流通の整備	139
第1項 大都市江戸の誕生	139
第2項 国内流通の整備	141
<b>第4章 江戸時代における町人文化の隆盛</b>	145
第1節 町人社会の出現と文化の隆盛	146
第1項 町人の出現 —松坂商人を事例に—	146
第2項 町人文化の隆盛	150
第2節 町人の服飾の変遷 —町人階層の女性たちと小袖—	152
第1項 小袖の小史—貴族の下着から武家、そして町人の表着へ—	152
第2項 町人の服飾	161
第3項 町人小袖の展開	163
第3節 小袖と出版文化 —雛形本や美人画と小袖—	165
第1項 小袖と出版文化	165
第2項 雛形本や美人画と小袖	167
結語	171
参考文献	175

第1章では、信長の天下取りの偉業と政策について歴史的に丁寧に追いかけている。信長は、天下取りの途上で、すでに中世社会の社会的基盤であった荘園制や寺社勢力を次々に潰している。古代中世的なものとは、庶民が武装していること、国の基礎が農業にあること、政治と宗教が結びついていること、そして比叡山延暦寺や石山本願寺などの宗教勢力が、独自に武装し租税を徴収し社会的に自立して存在していたことである。比叡山延暦寺も石山本願寺も、武装しており僧兵を抱えていた。一向一揆が起こったときは、必ず後ろに石山本願寺がいたのである。信長は京都に攻め上がるために斎藤道三の居城があった岐阜を陥れるが、単に城砦としての城として岐阜を手に入れただけでなく岐阜の城下町も作っている。楽市楽座を導入した城下町を作ること、商工業を富の源泉として捉えているのである。信長と秀吉の安土桃山時代がもたらしたのは、農業が国家の富の源泉であるような社会から商工業が富の源泉であるような社会への転換の契機であり、そういう意味で、

日本の「近代」を用意したのは、織豊政権であると言っていいのではないだろうか。確かに政治的な近代は明治維新によってもたらされるのであるが、社会、特に経済的な意味での社会の近代は、織豊政権の政策によって準備されたのではないだろうか。その政策の要として都市の形成、町づくりがある。楽市楽座を実施する城下町を作り、商人を呼び寄せ市場としての町の育成を図ったことに、信長の日本史における画期があるという分析と指摘は、審査委員からも高く評価された点である。

信長によって切り拓かれた道は秀吉に継承された。第2章では、秀吉の都市政策に重点をおいて考察している。例えば京都も秀吉によって完全に城下町になった。決して古代の天皇と公家の京都ではなくなって、城下町になった。それは、秀吉が築城した聚楽第を中心に秀吉が京都の町を編成しなおしているのである。信長と秀吉が作った都市は、それ自体が富を生み出す生産都市である。富の源泉は、それまでは農業だけだと考えられていたのに、商工業も富の源泉だと考え、そういう都市を意識的に作ったのが、信長であり秀吉だったのである。

第3章では、徳川幕藩体制の意義について考察している。江戸時代には、「織田がつき、羽柴がこねし天下餅、すわりしままに食ふは徳川」という狂歌がある。信長・秀吉・家康三人の天下統一を餅つきに例えたものであるが、織田信長が天下統一の先駆けとなり、信長の継承者である豊臣秀吉が近世社会の基礎を築き、徳川家康は座りながら二人の苦労の結晶を悠々と「食べている」、つまり、享受しているということであろう。

第4章では、江戸時代における町人文化の隆盛について考察を行っている。徳川家康の江戸時代は、基本的には、この信長と秀吉によって敷かれた軌道の上を走っている。武士が支配階級であるが、元禄や化政の文化に象徴されるように、文化の担い手は武家というよりはむしろ町人に移っている。信長が播き、秀吉が育てた町人文化という苗が、大きく育ったのが江戸時代ではないだろうか。つまり、支配者階級として武士は威張っているものの、社会の中心で活躍しているのは町人なのである。理念としては、士農工商という身分制度の最下層に属する町人が、社会や文化の主要な担い手となっているのが、江戸時代なのである。

日本の歴史の中で、江戸時代はとくに封建的であり男尊女卑の社会であったため、女性はよく虐げられていたと言われている。しかし、浮世絵や井原西鶴(1642-1693)などの好色物や近松門左衛門(1653-1724)の心中物に描かれている女性を通してみると、実際には生き生きと活躍していた町人女性が少なくないように思える。そのことを端的に示すのが、小袖である。小袖は現在の「着物」の原型となった衣服であるが、平安時代に貴族たちが着ていた十二単の肌着として身につけたものである。戦国時代から江戸時代初期には武家も着るようになり、やがて町人女性も着るようになった。つまり、江戸時代になると小袖は身分を問わず着られるようになったのである。それだけでなく、町人女性が小袖の流行の発信源となっているのである。

小袖は、時代や社会の変化と共に変容を遂げていることが分かる。小袖は、時代の社会構造の変化を映す鏡でもあった。小袖を通して見えてくる江戸の町人文化の興隆は、江戸幕藩体制下で想像以上に社会の平準化が進んでいたということを見せてくれる。日本社会がその中にすでに明治維新を胚胎していたということである。つまり、町人文化の興隆と小袖の流行には、日本社会の構造変化、「士農工商」の時代から「四民平等」の時代へ社会階層の変容が着実に進んでいることを見て取ることができるのではないだろうか。つまり、信長と秀吉によって作られた都市と都市文化が日本社会の平準化の原動力になったということである。アジア・アフリカ世界の中でもスムーズな近代化と国民国家の形成をなしえた稀有な国が日本である。その理由、つまり、近代

を準備したものを、私たちは信長と秀吉の政策に見た。そして彼らによって敷かれた軌道を江戸の町人文化が走ったということにこそ、明治維新以後の日本の奇跡があるのではないかということである。

江戸幕藩体制下の町人文化のなかで静かにしかし確実に日本社会の構造変化、来るべき明治日本の社会を予期させるような構造変化が起きていることを端的に示すメルクマールとして、現在の着物の原型となったという小袖に着目、その小袖の大衆化とその小袖の流行りの発信源が、武家の奥方から町人女性に移行していることを鮮やかに描きだすことに成功している。この分析も、彼女の博士論文の独創性を示すものとして高く評価された。最後に、彼女の研究は、自身がインドネシアからの留学生であるということ意識し、歴史上の縁の地を積極的に精力的に歩きまわるといふ現地調査を行っており、そして、それが研究に十二分に反映している。

副査の先生お二人からも指摘されているように、彼女の論文は、非常にシャープな問題意識に支えられ、そして、自分の立てた仮説を論証するために、博士論文としての要件を十分に備えるだけの文献研究と現地調査を繰り返し、論文を構成している。よって、ここに博士の学位を与えるにふさわしいと、審査委員会は判断した。